

論文審査の要旨

報告番号	総論第 42 号	学位申請者	下高原 理恵
審査委員	主査	後藤 哲哉	学位 博士 (医学・ <u>歯学</u> ・学術)
	副査	柴田 昌宏	副査 中村 典史
	副査	西 恭宏	副査 比地岡 浩志

Anatomy of the Lingual Nerve: Application to Oral Surgery

(舌神経の解剖学的研究 - 口腔外科領域への応用 -)

舌神経は求心性線維・副交感性線維・味覚線維を含み、下顎骨内面を走行し口腔底へ至る神経で、舌前 2/3 の知覚・味覚、顎下腺や舌下腺からの唾液の分泌に関与する。歯科領域においては、下顎の埋伏智歯抜去時に舌神経を損傷したり、下顎孔伝達麻酔後に舌神経麻痺が生じることがある。これまで舌神経に関する研究は、下顎管や下顎第三大臼歯との位置関係などの研究が行われてきたが、舌神経の詳細な走行と分枝に関する報告は少ない。そこで口腔外科的処置における偶発症をより低減させるために、肉眼解剖学的に舌神経の走行・分枝・舌下神経との交通の有無を検索した。特に分枝に関しては、舌神経に鼓索神経が合流してから顎下枝を出す間の領域を中心に観察した。対象は鹿児島大学歯学部解剖学実習に供された御遺体 10 体 20 側で、肉眼的に舌神経と舌下神経を剖出・観察した後、実体顕微鏡下でさらに詳細に剖出し、写真撮影・記録した。

その結果、以下の知見が明らかにされた。

- 1) 舌神経に鼓索神経が合流してから顎下神経節に顎下枝を出すまでの領域では、舌神経からの側枝がすべて認められ、口蓋舌弓から下顎最後臼歯との間の口腔粘膜に分布していた。
- 2) 舌神経からの側枝は、側枝間の交通枝の有無などにより 3 type に分類した。
- 3) 舌神経と舌下神経の交通枝は全例に存在した。また、交通枝は舌外 (舌骨舌筋外表面) ・舌体・舌尖の 3 カ所で認めた。

舌神経の鼓索神経合流部から顎下枝で分かれる側枝は、これまで「口峽枝」や「頬粘膜枝」という用語が使用されている。今回観察された側枝のうち、中枢側の側枝は口峽へ向かって走行したが、末梢の側枝に関しては口峽へは走行しておらず、最後臼歯粘膜へ走行していた。これらのことから、末梢の側枝は「臼後枝」ではないかと考えられた。また、舌神経と舌下神経の交通枝は全例で 3 カ所認められ、舌神経と舌下神経がループを形成することにより舌下神経に舌神経の知覚線維も含まれることが推察された。

本研究は、舌神経の分岐パターンと最後臼歯部粘膜へ向かう「臼後枝」の存在を明らかにし、舌神経と舌下神経との交通枝は常に存在することを示した。本研究で明らかとなった舌神経の走行や分岐のバリエーションを認識することにより、舌神経麻痺をはじめとする偶発症をより軽減させることが期待できる。よって本研究は学位論文として十分な価値を有するものと判定した。